



胆のう結石症  
「サイレントストーン」の  
こと

---



koberyol

わたしの実父は胆のう結石症だった。

たしか、わたしが五十歳頃だったから、かなりの老齢の時の石に苦しめられたな、と記憶している。

胆のうの石はときどき暴れだし、七転八倒の苦しみが父を襲った。医者嫌いで昔気質の父親は、それでも手術をしようとはしなかった。

結石は、「怖い」とそれを見てわたしは正直、思った。

わたしが結石に関心をもちはじめたのもその頃で、悩ましいことに人間ドックの検査の結果、自分の体内に大小二個の結石と、砂のような状態の結石は発見されたのだった。

医師はつぎのようなことを、わたしに説明した。

『胆石には二種類の学説があります。痛みをともなう胆石と、胆石があっても自覚症状がなく、痛まない胆石があるのです。問題なのは、この隠れ胆石、すなわち欧米ではサイレントストーンとも称され、痛みもなく自覚症状もない胆石のことです。なぜ、問題かという、医者嫌いや検査を嫌う人は少なくないと思いますが、自覚症状がないだけにそういう人の場合、石の発見が著しく遅れてしまうからです』

と、そのようなことを説明していただいた記憶がある。隠れ胆石、すなわちサイレントストーンは要注意なのである。

さて、胆石が痛む場合の、主な症状についてもふれておきたい。

症状は主に三つある。まず一つは、ずきずきと疼くように痛む疼痛である。それから発熱、そして黄疸である。胆石が体内にあるかぎり、いつこのような症状がでてもおかしくはないのである。

まず、胆石の痛みのメカニズムについて考察してみたいと思う。

ものを食べる時だが、胆のうが収縮して胆汁がでるわけで、胆石が胆のうの出口をふさぎ、胆汁の流れを中断し、そのために痛みが生じるのである。その様子は激痛がみぞおちの辺りから右肩や背中にかけて、刺し込むように走り、ひどい時には吐いたり、胆石が胆のうから落ちて胆管につまると黄疸が生じたりするのである。

わたしの場合、胃癌の手術が予定されていたので、胆石が胆のうのなかで活動して胆のう癌になるといった万が一の場合も考慮して、六十歳代の体力のあるうちに手術したいという希望をドクターにあらかじめ伝えておいた（因みにいま、わたしの年齢は八十歳代である）。したがって、胃癌の手術と、胆のうそれ自体をも摘出する手術を計画した。

聞いた話によれば、最近胆のうの手術は、腹部に四つの手術用の「アナ」を開け、その穴からモニターを見ながら器具を操作して、胆石を除去するばかりでなく、胆のうそれ自体も取りだしてしまうのだという。

わたしの場合、胆のうの中の石が案外大きくて、腹部に開けた穴から取りだすのに苦労した様子など、いろいろ説明をうけた。

胆のう袋をとったあと、胆汁は流れっぱなしであるものの、通常の生活に支障はなく胆のう袋を取ることは盲腸の摘出とおなじような感じである。

ただ、この手術は患者側としては、医師の豊富な経験が望ましく、セカンドオピニオンをふくめ、医療サイドとよくよく相談して行うことが肝要である。